

大川小学校の裏山、福井の10代訪問

津波で弟失った兄と思い共有

「自分の命を、大切な人を、地域を守ってほしい」—。東日本大震災から3月11日で8年を迎えた被災地では、肉親を失った20歳前後の語り部が、思いや教訓を伝えるため奮闘している。同世代の福井高専（福井県）の学生3人が宮城県内の被災地を訪れ、震災直後の状況や被災地の今に触れ、語り部の思いを「手渡し」で受け取った。

■ ■ ■

円形の平屋と、緩やかな曲線の2階建て部分を組み合わせた校舎の周辺は一面更地だ。ひっきりなしに大型ダンプが行き交い、今も復興の途上であることを告げている。

地震直後に児童たちが待機していた校庭から、体育館裏の山を目指した。シイタケ栽培の体験が行われるなど、裏山は児童にとってなじみ深い場所だったが、実際には避難先にならなかった。斜面の大半はなだらかで、低学年でも難なく登れそうだ。永沼さんは「弟の命を守ってくれたかもしれない場所。でも、そうならなかった場所」と紹介した。

■ ■ ■

多数の犠牲者が出た同校のケースは、避難誘導などを巡り全国的にも継続して大きく報じられた。市や県の過失責任を問う民事訴訟は最高裁で係争中だ。

永沼さんは日頃の児童と教員の関係から「先生は絶対に弟を守ろうとしていたと確信している」とおもんばかり。一方で、「（わが子を失った悲しみから）当時の話を聞くことも、ここに来ることもできない人もいる」と遺族の苦悩も代弁した。

助かる場所も、逃げ道もありませんながら命が失われたことは「全国どこでもありうる」。だからこそ「地域をよく知らなきゃいけない。身の回りの危険を察知する、逃げる場所を考える、大切な人たちと事前に話し合うことはできるはず」と訴えた。

さわやかな青空に、白い雲がぼっかりと浮かんでいた。

2月26日、川をさかのぼった津波により児童74人と教職員10人が犠牲になった宮城県石巻市旧大川小学校を訪ねた。裏山から校舎周辺を見下ろし、語り部の永沼悠斗さん（24）＝同市、東北福祉大学2年＝は言った。「きれいなんだよ、景色が。山があって、川も海もあって。ここに育って大川小を卒業したことは誇り」。当時高校生だった永沼さんは小学2年の弟を亡くした。



旧大川小学校の裏山に登り、弟を亡くした永沼悠斗さん（左端）の話を聞く福井高専の3人＝2月26日、宮城県石巻市

震災の2日前、同市で震度4を観測する地震があった。部活の自主トレでたまたま海岸にいた永沼さんは、津波が来るかも知れないという恐怖を感じたが、その日に家族と津波や避難について話すことはなかった。「人生最大の後悔」と述べた。

■ ■ ■

「一輪車の練習をした」「カーブのある廊下でぞうきんがけ楽しんだ」「おぼけやしき大泣き」…。

旧大川小学校近くのプレハブ小屋に展示されている500分の1の「まちなみ復元模型」。幅広い世代が思い出を記した旗が無数に立てられている。

「震災では思い出も奪われた」と永沼さん。復元模型の完成は「懐かしく、楽しく、そして悲しい。非日常の仮設住宅暮らしで忘れていたことが思い出せた。心の復興に役立ってくれた」と話した。

直前まで歩いていた更地のかつての姿を思い浮かべ、福井高専4年の中島和さん（19）＝福井県鯖江市＝は「集落があって、学校があって、私たちと同じように思い出が詰まっている」と涙ぐんだ。

永沼さんは「（被災地で聞いた）この瞬間の“熱”を思い出せるよう、話し合ったり避難場所を実際に歩いたりして、防災を日常にすることをみんなで考えて。聞いて経験したことを福井で共有してほしい」と提案した。

× × ×

2月26、27日、福井高専4年の中島和さん（19）、福田奈月さん（19）、水島美咲さん（19）の3人が宮城県内の被災地を訪れた。同県仙台市に本社を置く河北新報社の武田真一防災・教育室長（60）が案内役を務めた。3人は同校「地球物理学研究会」に所属し、過去の気象災害の文献調査などに取り組んでいる。